手先の動きと子どもの感情③

清　水　エミ子

◎手の反応を、手にかえしていく

あれなんだろうねって　いってみるとき　しんたろうちゃん目をパチパチやって　そのつぎ手のゆびをこちょこちょうごかすんだよ。そいで　また目をパチパチってやって　そおっとさわるんだ。

ぼくしってるよいつもやるから。せんせいもみててごらん。

おにわでひかったいしみつけたときも　けむしみたいなしろいむしが　つちからでてきたときもそうだったもの。

しんたろうちゃん　手でつかむときもピクピクっとうごかしてから　つまんだよ　手って　おもしろいねえ。（よしひさ）

ひろきくんて　手のうえのところ（手くび）くるくるまわるところを　まわしてから　なんかやるのねいつでも。

手のうえのところ（手くび）くるくるまわしているとき　くびがひっこんでるみたい。そいでちっと、あかいかおする。せんせいに　なにかやんなさいっていわれたとき　いつもそうなんだよ。

じぶんでやるっていったときでも　やるときになると　そういうふうになるの。どうしてだろうねえ。

じょうずにできるかどうかしらべているのかなあー　でもへんなの。（とあこ）

やっちゃん　くれよんで　えをかくとき　パン　て　手をたたいてからかくよ。

おしまいって　いって　またパンパンて　手をたたくの。おわりのとき　おおきいおとにたたく。

やっちゃんて　おとなみたいでしょ。

つみきやっててもパンパンて手をたたいてつんだりするから　だれがつみきやってるかって　みなくったってわかっちゃうんだ。やっちゃんがやってるのって。（しげる）

子どもたちのほうが、私たち保育者よりはるかにひとりひとりの友だちの心の表現の特徴をとらえているのにおどろきます。こんなことばを聞かされて、あらためてしんたろう君やひろき君、やすはる君の手を、いいえ、表現の仕方を見つめてみたのです。

全くすなおに手くびが、手、ゆびが、語りかけ（自問自答）いろいろのことをうったえているのです。

しんたろう君の目をパチパチやって手指の第二関節までをこきざみにうごかす反応も、そのときそのときによってちがっていることがわかります。

1思いがけないことを見つけたとき

まわりの葉っぱが動いていないのに、散りかけた一枚の葉が風にくるくるまわるように動いているのを見つけたときなど、目をパチパチさせる早さも早くなり、ゆびさしをする人指しゆびのこきざみな動きも、大きくゆび全体を動かしているのです。そして、まず、手で反応をして、じっと見つめてから、「おかしいぞ、あれだけいっぱいゆれてる、へんだぞ、かぜって、みんなおんなじはずなんだぞ、いっぱいゆれるはずがないんだけどなあ」といってながめまわし、うしろからよこからのぞきこんで、終わりにその葉のまわりに手をかざしてみて、近づき、かれかけていることを発見したのです。

「もうすぐ　しんじゃうから、やだやだって　いってたんだ、このはっぱ、かわいそう」と、つぶやき、また、目をパチパチやっていたのです。

2はじめての経験を前にしたとき

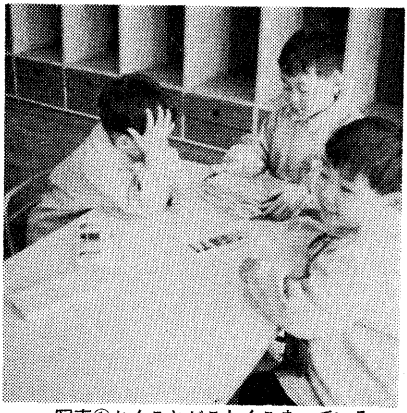
（ハンコあそび）

えのぐで作った、スタンプ台に、はんこをのせようとするときなど、目のパチパチもゆっくりになり、ゆび先の動きもゆっくりになり、じっと見つめないと、みのがしそうになるのです。

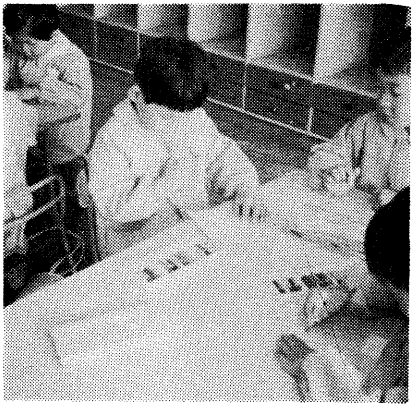
そして、はんこの前で、ゆびをちょっとふれてみてから、「どんなのになるか」「よし」などと、口の中でつぶやいてから行動に移っています。

◎かくこわさが手から手へもどってかきはじめる

写真③どうしようかなー



写真①かくことがこわくこまっている



写真④こわさがとれてかきはじめる

写真②こまったなー

はじめての経験に対して、どんなことにも積極的に参加できる子ですが、一回やってみて気にいったときと、気にいらなかったときのゆびや手の反応がちがうことを発見したのです。

気にいらないときは、人指しゆびと親ゆびで輪をつくり、人指しゆびの先で、親ゆびをはじいているのです。フィンガーペインティングをしたときも、はじめはいやがって同じ反応だったのです。

気にいったときは、右手の人指しゆびをゆっくり動かして、ほっぺたをいじっているのです。

こんな反応の傾向がわかってから、私は、しんたろう君に（気に入らないとき）ちょっと目先をかえてから、その活動に移らせるようにしてみたのです。

フィンガーペイントをしたときも、はじめにわりばしで、線をかくようにさそったり、ゆびにビニールの袋をまいて絵具をかきまぜさせてから、他の友だちのは、ゆび

でかくから指紋がみえること、袋をかぶせてやったのでは、指紋がでないことをみせておいてから、しんたろう君自身で絵具にゆびをつっこませることにさせたのです。

このように、しんたろう君のゆび先の動きをみつめていると、「先生、ぼくこれいやなの」とか「ちょっとやだな」とか「もっとちがうこともやってみたいな」という要求がはっきりよみとれるのです。そのためにしんたろう君に、失敗感を強くもたせずにすみ、やってみるたのしみ、やればできるという自信を身につけることができたのです。

（しかしその子に必要な失敗はさせなくてはならないが）

◎ひろき君の手首をぐるぐるまわす反応

自分の行動のブレーキ役をはたしている手首。

だれか友だちの声が耳に入ると、自分がなにをやっていても、その方が気になる、うつり気な性格なのです。（しょう動的に行動する）

そしていざその場にのぞんだとき、我にかえり、これは自分の手におえるかな？　と考えたときに手首が動いているのです。

手首を動かすことによって間をおき、どうそのものに対処したらよいか考えるようです。自分の手におえないな、と気づいたとき、手首のまわる回数も多く、首も背の中にめり込んでいくのです。

手首をまわす余ゆうもなく活動につき進んでしまったときは、きっと失敗しているようです。

ひろき君が、手首をまわしていることがわかったときには、保育者は、ことばかけをやめ、じっとまっていてあげることが必要なのです。途中でことばかけをしてしまうと、このブレーキを自分で、きかせることができなくなってしまうからなのです。

手くびのまわしが終わったとき、ひろき君の呼吸も　みだれがおさまり、ゆっくり口が開いたり行動に移ったりできるようになることを発見したのです。

ひろき君の手まわしは心の安定剤とブレーキの役も果たしているのです。

やっちゃんの手をパンパンとたたく合図をじっとみていると、パンパンとたたく前に、手の平をちょっとそらせることと（ゆび先をそらせる）それと同時に、ベロ（舌）で下くちびるをペロリとなめることが、同時くらいにおこなわれ、そのあとにパンパンと手を打っていることがわかったのです。

だから、やすはる君が手をパンパンと打つときは、もう、これでよし、さあやるぞという、かまえの表情のようです。

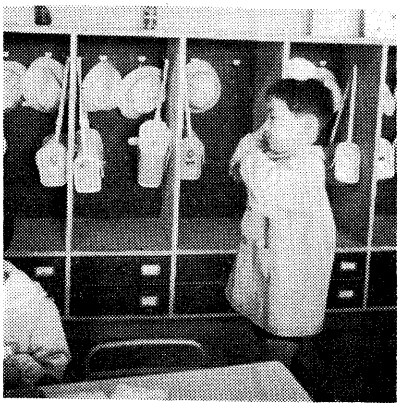
手のゆび先や平をそらせたり、片手で平をなぜたり（これはと

◎玉がおちる不安に対する恐怖が手にあらわれている

写真⑦玉は頭にのる　手の表情…

写真⑤頭にのせようとする

写真⑧



写真⑥おちそうなので手でカバーしている

きどき、特にこまったときに表われるようだ）するときは、さてどうしようかと、心が新しいものに立ち向かったときの表われと信号のようです。

そして心が新しいものに立ち向かってそれに対して取り組むみちすじやとば口をみつけたときに、よしこれでいい、とかこのへんからやってみるぞ、という合図のパチパチの手ばたきの表現がおこるのです。

パチパチとせっかちに間隔短く打つときは、いちかばちかやってみようとするぼうけんを決意したときの表われのようです。パチ、とひとつゆっくり打つときは、行動や活動、問題の解決に対する見通しがはっきりもてたときに、安心と余ゆうをもって打つので、ひとつで事がたりているようです。こんなおちついた態度のときは、くちびるをなめることがなくて行動に移っているようなのでわかったのです。

活動が終ったときのひと打ちや、こきざみ打ち、活動の途中で打つパチパチは、そ

のときどきのうったえがあるようです。

・活動を完成したという克服感のパチ

・見通しがまちがえて失敗してしまった無念のパチパチ

・一段階終わったぞという活動の区切りを確認するためのパチ

・一区切り終わってその先、どうしてよいかまよってしまったときのパチパチ

などがあることを見分けることができたのです。

私は、ここまで、子どもたちの手をじっと見つめて来たとき、ひとつの迷いを感じ始めたのです。

子どものくせと、手の動きを、どう区別したらよいか？　ということです。手は、顔や体より早く心を表わしてくれる心を表わす、第一の表現場所のように考え見つめてきたけれど、これはひとりひとりの、表われのくせを見つめているのではないだろうか、だから、私が見つめようとした手や、ゆび先のうったえ（表情）としては、ややズレがおこってくるのではないかと、まよいが生まれたのです。

そして、もう一度、クラス全体の子どもたちの手、手の平や、ゆびの先を見つめなおしてみたのです。

同一場面での手やゆび先の観察

・同じ経験や活動を、同じとき同じように体験しているのに、ひとりひとりの顔がちがうように、全員の手の表情は、ちがっているのです。

しかし、A君、B君、Cさん、Dさんと同じ傾向の表われ方をするのだ（こまかい部分の表われはちがうが）ということは、大まかなワクとしてつかむことができるように感じたのです。（これは、わずかな事例でだんていしてはいけないことなので、これから多くの事例で考えていくつもりです）

例①どんな子どもも同じように体験でき、理解できる活動で、手の表われを観察することにしたのです。

他のクラスの友だちの前にいって（一定の場所に立っている）自分の名前をいって手をつないで一定の場所まであるいてくる、という活動を指示してみたのです。

条件、このとき、男児は男児と組む、近所や仲よしをさけ、遊んだことのない人、名前をしらない友だちと組むように配列して実験してみたのです。

1、知らない友だちの前に立ったというだけで手やゆびが反応を示す子（あまり目立たずに）。

2、向かい合っただけではまだ安定していて楽に体のよこに手がダラリとさがっているが、名をつげるときになると手の先だけをもじもじしてからでないと自分の名をつげられない子。

3、ぼくあの人だな、とか　意味もなく、うでから手全体を動か

し体もじっとしていられないような、体全体で反応してしまっている子。

4、ひと区切りの行動から次の区切りの行動に移る時にその合図のような手や、ゆびが反応をしている子。

(1)友だちの前に立つ　(2)名前をつげる　(3)手をつなぐ　(4)あるいてくる

などの行動移向のときにおこる緊張などの心の動きを表わしている子などのように、四つに大別できるのではないかと思われるのです。

この大別された中で、ひとりひとりをみつめると、こまかい表われは、ひとりひとりちがっているのです。

そして、この四つのタイプそれぞれが、まず手で反応し、表われを示し、そのことがらを、また手にもどして行動したり、反応したりしているということが、実験場面を通してうかがえたのです。

例②

はじめての場面や活動に入ったとき

○なわでんしゃをつくって、でんしゃごっこしたとき、

場面　ホールに　なわとびの（木線）なわを輪にした、なわでんしゃを数本作って置いておいた。（床に無ぞう作に）

方法　なわでんしゃのいちばん近くにいってみていたせいいちに、「つかってもいいのよ」と声をかけるだけにした。

(1)　せいいちは「うん」と答え、なわに近づき、こしをおろして、右手の親ゆびを横にうごかし、中ゆびのゆびのはらを二度三度、おうふくなぜをした。

そして左右をみまわし、なかよしのやすはるを「おーい」とよんだ、せいいち**は**、やすはるを呼んでいる間も、何回かゆびで中ゆび人指しゆびのはらをおうふくなぜしていた。

やすはるが近づいて「これなあに」ときくのと同時に「まるのなわなの」とせいいちははなしながら、左手でなわをそっとさわってみた。

このときの右手は、かるくにぎられていて、左手の第一関節だけでつかんでいた。そして「はいろうか、やっちゃん」と顔をみあわせてから、左手と右手で　なわをわしづかみにして、体を中に入れた。

親ゆびのはらで中ゆびと人指しゆびのはらをこする反応を、左手のゆびで　さわってにぎるという行動に移しているのです。

(2)　ゆみこは、つなを上からながめながら、

右手の親ゆびを上にのばし、なわの四本を手の平のところでにぎったり、ひらいたりして反応していた。手の先は、たてにおかれ、親ゆびをアンテナのように立てて、のこりの四本をあかちゃんのにぎにぎのように、にぎったり開いたりをくりかえしたあ

と「なにするんだろうなあ」とひとりごとをいって、立ててあった親ゆびを、口の中に入れて、しゃぶってから、右手と左手を同時になわにつけて、にぎって、ひきずってあるき、友だちのまゆ子に「やろうか」となわをさしだしてふたりが中に入って、でんしゃにのってかけまわっていた。

右手のにぎにぎの反応、左右の手でなわをつかむ行動に移していったのだ。

(3) ひろかずは、「なわでんしゃのえきをつくろう」とつぶやいて、平均台の所にかけて行き、ピタリと止まり、平均台に手をかけもち上げたが、重くて動かない。まわりをみまわし友だちのけんじをみつけ近づいた。

「ねえ」とひとこえ声をかけて次のことばにつまったとき、ひろかずの右の手の平は、自分の右の胸を上から下に、早い速度でなでおろす反応をして次にいうことばにつまっていた。

三、四回なぜて胸の上に手の平を止めて、「もってよ、おもいから」とまっ赤な顔でたのんでから、右手を胸からおろして平均台の上にのせ、次に左手を平均台の下にかけてから右手も下にまわして両手で平均台をもち上げ、けんじの手助けをまっていた。

手の平を胸にあててこまった反応をし、次に左手と右手を平均台の上にのせてから平均台をもち上げる行動に移している。

(4) とあこののっているなわでんしゃに「あんたものりなさいよ」とあゆみはさそわれ、なわを胸もとにおしつけられた。びっくりしてあけみはしゅんかん、左手をパッと左のほっぺにもっていった。ほっぺたにゆびの甲をおしつけて（ゆびの先を下に向けゆびの甲をほほにおしつけて）目をつぶった。そして次のしゅんかんに、両手の平をなわにおしつけ、「やなの、のんないの、いいの」と きょひの行動を手の平で行なっていた。

左手の甲をほっぺに持っていって、こまった、というまよいの反応をして、次に両手の平できょひの行動に移している。

このように、子どもたちの手の動きをみつめていると、その表われには個々のちがいはあるが、どこよりも早く（外に表われるところのなかで）表われる反応が、手でありゆびであり、その手やゆびの反応を、次に、手やゆびにかえして行動している、ということが、わかったのです。

今回は、誌面のつごうで、なわでんしゃの事例の報告しか記せませんでしたが、もっともっといろいろなはじめて出あう場面での反応と行動を観察し、子どもたちの心の動きと行動の特徴を、手とゆびからとらえてみたいと思います。

そして、子どもたちの心の動きをまちがえなくとらえ、集団生活をたのしく創造し、ひとりひとりの生活が充実しておくれるような保育の手助けをしたいと思うのです。

（太田区立蒲田幼稚園）